

四 中国のアナキズム運動

はじめての上海行

一九一二年(大正元年)一〇月、大杉栄、荒畑寒村らは、『近代思想』を創刊し、いわゆる冬の時代の沈黙を破る歴史的な第一歩をふみ出した。その『近代思想』一月号(大正元年十二月三日発行)の後記「大久保より」で大杉は次のように書いている。「澳門の師復という人からエスペラント文の手紙が来た。以前広州で支那文及びエスペラント文の無政府主義雑誌『平民之声』を出していたが、袁政府から逐われて澳門に走り、此処でもまたポルトガル政府から雑誌の発行を禁ぜられた。しかし何とかして近日中に又出すと言っている。雑誌と一緒に小冊子も送って来たが、その「軍人之宝筏」の如き Alfred Russell Wallace の排斥軍国主義、Gustave Herve の反対祖国主義、Portalle の徴兵の悲境、及び「軍人と服従、社会革命者軍人唯一之事業也」とを収め、実に痛快淋漓たるものがある。なおこの雑誌には何れ僕も寄稿する筈だ。」

さて、一九一四年の春、大連浜町満鉄発電所の試験室で、ストップウォッチと計算尺を握って積算電力計の検定をやっている山鹿のところへ手紙がきた。それは「中国の同志師復が、上海に潜入しエスマ併用のアナキズム運動誌『民声』を週刊で出し始めている。応援に行かないか」という内容の大杉からの手紙であった。

山鹿は、そろそろ大連を動いて、ちょっとでも欧州へ近づこうと考えていた矢先だった。手紙を読むなり「よし来た」と山鹿は、メインスイッチを切った。そうなると決断と行動がすばやい山鹿である。その場で辞表を書き、技師長の机において宿へ帰った。ぐずぐずしていると引止められて何かとうるさくなる。身のまわりのもの、冬服とガラクター一切は、下宿のニーヤに進上して、荷物はトランクひとつ。名残りに奉天や旅順を見物した後、大連港からすぐ上海航路の火輪船にのりこんだ。

その船中で、ひとりの男が話しかけてきた。「山鹿とはめずらしい名だ、上海の山鹿三郎さんの身内でしょう」と、私のトランクのネームを見ている。上海には山鹿洋行という従兄が経営している古くからの店があった。その関係者との早合点である。そして、おせっかいぶりを發揮して上海では勝手がわからないだろうと、船が楊樹浦に着くと電話をかけ馬車を雇ってくれた。こうして山鹿は強制的に広東路の山鹿洋行のところに連れて行かれることとなった。

——ところで、上海へ飛んできたものの民声社の住所は秘密で、P・O・BOXだけしかわからなかった。とりあえず手紙を出して、連絡をまわっていると、翌日の午後、黒めがねをかけた細い男が訪ねてきた。「君が山鹿泰治か」と手紙を示してエスペラントで話しかけてくる。「君をうたがうのではないが、念のために何か証明するものはないか」と聞く。私は丁度、大切にもついていた幸徳の『パンの略取』をとり出して「進呈する」といった。(これはみせかけに、古雑誌の表

紙をつけて製本したものだ。」

師復は「民声社の住所は絶対の秘密だが……、君を信頼する」と両手で握手してきた。その片手が冷たく硬いのが、妙に気になった。

民声社の秘密印刷所

翌日早朝、教えられた競馬場の右手の通りを進んで、右へ折れた裏通りの番号をめあてにさがすと、秘密アジトはすぐわかった。

静かな住宅地帯で、高い塀をめぐるした一角にある。門扉の金環を叩くと、横の覗き窓がひらいて、人の眼がそこから光る。来意を伝えると、しばらくして戸が開き、師復が手をひろげて立っていた。お定まりの石畳、正庁を通ると、印刷所があった。若い女が二人、手で機械を廻している。紙差しも女である。師復は自分の部屋へ入ると、黒メガネをとって、ガチャーンと手を外した。右手が肘からなく白い手袋もはめていない。昨日とは別人のようである。私のびっくり顔をみて笑いながら、「実は、僕は英国租界ではお尋ね者で、みつかったら最後つかまるんでね。外出のときは変装するんだ。この右手は二三歳のとき、広東で爆弾製造に失敗して、とばしてしまっただ」といった。

この秘密印刷所の印刷機は、広東—マカオと官憲に追われながら持ってきた六頁手動ロール機一台で、エス語と漢字の活字が完全にそろっていた。「民声」は週刊で、四六版三二頁、半分は漢字、半分はエス文、写真版も入っていた。師復はヤカマシ屋だったから、印刷の出来上りは

鮮明だった。裏を刷るときでも、透かしてみても頁数が表とキチンと合わねば承知しなかった。秘密で、しかも無料で配布するのだからどうでもよさそうだが、それだから尚さらというのが彼の主張であった。

民声社のメンバーは、師復の妹ムッテ（無為）、ヤウヨの外に若い女が六、七人、男は十人ほどだったが、何分、毎週原稿をつくり、編集し、組版、印刷、製本、発送の一切をやるのだから、師復の働きは超人的なものであった。いつも先頭に立って、発送なども片手でたくみにやっていた。エス語がとくにうまいのは二二、三歳位の青年佩剛（ペーゴン）であった。（当時、師復と同様、逮捕状が出ているお尋ね者で、のち無為と結婚して師復の遺業をついだ。）私は早速その日から、エス文欄の組みを手伝いはじめた。また女たちが、一六頁のロールのシャフトの両脇につけたプーレーを手廻しするのを、交替で手伝った。

このようにして山鹿は、民声社の共同生活の仲間入りをし、一人の同志として分けへだてなく働きはじめたのであった。

——食事は、一同二階に集まって、洋食皿にもり切りのメシと野菜に卵ぐらい。ときどき南方同志からカンパのバナナとピワが出た。米がなくなると、アズキを煮ただけのものが何日もつづいた。それは虫くいだらけのひどいもので、なれるまでは食べられたものではなかった。

師復はそのころ二八歳、妻君と離別して、真の恋愛による結婚をするまでは、と独身であった。彼は肉をくわず、酒をのまず……とたくさん戒律を立てていた。「将来自由社会の民衆が実行することを、今からアナキストたるものは実行し、民衆の先頭に立たねばならない」と、他

人には強制はしなかったが、自ら堅く実行した。そしてまわりの者は自然にそれを見習うようになっていった。

中国のアナキズム運動

中国のアナキズム運動は、義和団事件以後、国内諸制度改革の必要を感じた清国の中央・地方の政府が、一九〇〇年に入って送り出したパリと東京の留学生のなかから、期せずして始まった。

一九〇二年、孫宝琦が中国公使としてパリに赴任したとき、二〇人以上の留学生が同行したが、そのなかに李石曾、張静江という名門の青年も含まれていた。李は公使随員として来たが、まもなくアナキズム宣伝のためにその地位をすてた。張は富裕な大実業家の一族で、莫大な資金を運動のために抛出しはじめた。一九〇七年李石曾、張静江、褚民誼、呉稚暉らは、『新世紀』を発行した。(後者二人は日本に遊学したこともある。)それは三年にわたってつづけられ、アナキズムの思想と運動を世界中の中国人留学生に流布し、大きな影響を与えたのであった。

一方東京においては、日本のエスペラント運動の発端と深く関係しつつ、それは始まった。大杉栄が、神田青年会館で開かれた第一回日本エスペラント大会の席上で、『桃太郎』をエスペラントで話し喝采を博したのは、一九〇六年九月二八日のことであった。それに先立って彼は、九月一七日から本郷豊岐坂の習性小学校で日本で最初のエスペラント学校を開講し、一月一六日には神田の国民英学会で、第一回卒業式を挙行了した。生徒四五名に対し、大杉はエスペラントで「卒業生に告ぐ」という訓辞をしたが、その生徒のなかに多数の中国人留学生がまじっていた。(この学校は、大杉が平

民新聞の記事「青年に訴う」で起訴され、一九〇七年(明治四〇年)五月果嶋へ入獄したので終ったが、その刑が満期になって一九〇八年三月に出獄すると、大杉はさっそくまた中国留学生二〇名のためにエスペラント語講習会を開いているのである。この講習会第一回三カ月間の終了直後、大杉は赤旗事件でまたまた検挙され、二年間千葉監獄で服役することになるが、これらは、一九〇七年の夏八月に開かれた幸徳らの社会主義講習会と相俟って、その後の中国の革命運動とエスペラント運動の双方に、大きく相関的影響を与えたのであった。)

このエスペラント学校に学んだ中国留学生たちの多くは、大杉の強い影響を受けてアナキストになっていた。その中国留学生の中心は張継であった。彼は一八九九年に来日し、一九〇五年孫文の同盟会結成と同時にそれに加入した。早稲田で政治経済を学びつつ、幸徳、大杉らと知り合い、やがてアナキズムに深く傾倒するようになった。

また、一九〇七年初め、劉光漢とその妻、何震が日本へ渡ってきた。それまで劉夫妻は愛国団体光復会の会員であったが、張を通じて幸徳らと知り合うとたちまち熱烈なアナキストとなり、そしてアナキズム雑誌『天義報』を発行しはじめた。同年八月三十一日、張継は劉夫妻とはかって社会主義講習会を開いた。第一回の講師は幸徳秋水であった。九〇名あまりの留学生が聴講し、大きな感銘を与えた。幸徳は、まず他国語である日本語で話さねばならぬことを詫び、しかし世界語エスペラントが通用する日がいずれ来るだろうと言った。第二回は堺利彦、第三回は山川均、そして第四回、第五回は、出獄したばかりの大杉が講師となった。

張継は後、一九〇八年一月一七日の金曜講演会に出ていて、たまたま当夜官憲の強引な中止・解散

命令で起きたトラブル「屋上演説事件」にまきこまれ、本郷署へ連行されようとした。当時彼は清国政府からその首に三千円の賞金がかかっており、引き渡されたら死刑まちがいなしであった。多くの同志が駆けつけて奪還しようとした。彼は半袖を捜査の手に残したまま、どさくさにまぎれて逃亡に成功した。数日間築地山田病院にひそんだ後、同志の手で日本を脱出、一月後にパリに現われてその地で活動を始めるようになった。彼が在日中に著した『無政府主義』は、留学生だけでなく中国にもちかえられて、大きな影響を与えるものとなった。

しかしこのようにパリと東京において、アナキズムが大きな主勢力となり、影響をひろげたのはほとんど在外留学生の間だけであった。『新世紀』や『天義報』がごく少数、政府の眼をくぐって中国本土に持ち込まれた。だが本土に根づくのは、やがて留学生が故国へ帰って、それぞれに活動し始めるときまで、なお待たねばならなかった。

中国において、真に中国のものとしてアナキズム運動が起こり、活動が始まったのは、劉師復——姓を廃して師復（これをエスペラント読みをしてシーホーと名乗った）によってである。

師復の生涯

師復は原名を劉思復といい、一八八四年六月二十七日広東省香山県（いまの中山県）に生まれた。一八九八年、一五歳のとき秀才となったが、榮達の途である科挙を放棄、革命を志した。一九〇四年、勉学のため日本に留学し、一九〇五年孫文によって中国同盟会が組織されると直ちに加盟した。この前後、横浜で李植生から爆弾の製法を教わった。一九〇六年、孫文の広東蜂起の計画に従って、大官

の暗殺のため帰国、香港で『東方報』の編集にたずさわって、時をまった。

のち師復は、「中国（辛亥）革命の迅速なる、人々みな功を広州黄花岡の一役、およびしばしばの暗殺事件に帰す」（民声二〇号）と言っているが、この頃の彼は、清朝帝政を倒すために暗殺と武装蜂起の併用を主張し、自らの生命を投げうって革命に献身するひたむきなテロリストであった。それは全中国を震撼させた徐錫麟の安徽巡撫使恩銘暗殺、日本留学生秋瑾女史が関係した安徽省高官みな殺し計画（一九〇七年）汪兆銘の摂政王暗殺計画（一九一〇年）などと共に、当時の中国の末期的圧政を背景とするものであった。

一九〇七年六月、惠州七女湖の蜂起に呼应し、師復は広東水師提督李準の暗殺を企てた。が、投げた直前に爆弾が爆発、右手首を失って逮捕されたのである。（左手と多くの本にあるが、山鹿によれば右が正しい。）一九〇九年、彼は友人同志たちの努力によって釈放された。この二年あまりの獄中生活中『粵語解』という書をあらわした。元来彼は文字・言語学に詳しく、その内容は錢大昕の『恒言録』、章炳麟の『新方言』と比称されるほどであったという。

この獄中二年間の思索で、彼はより明確にアナキズムを採る立場となり、従来混在していた民族主義思想を完全に脱皮した。そして出獄後はもはや政治の革命党——同盟会へは復帰せず、強権に反抗し、政治的秩序の一切を破壊する暗殺団を組織し、同盟会とほとんど関係なく活動をすすめることになった。すなわち彼の暗殺団は李準暗殺（一一年八月未遂）広州將軍鳳山暗殺（一一年一〇月遂行）を決定、師復自身は同志数人と摂政王戴鴻慈暗殺のため爆弾輸送中発見され、再計画中に武昌蜂起が勃発した。

清朝は蜂起鎮圧のため袁世凱を起用した。そこで師復らは、改めて袁を倒すべく目標を定めて北上、上海に至ったとき南北講和会議が成立したのであった。その状況をみた師復は暗殺団を解散し、広州へ帰った。「いまは、もう単純な破壊暗殺は不用である。この機会に乘じ、真の社会革命の種子をまくべく、活動しなければならぬ」と考えたのである。しかし一たん革命が成功するや否や、かつての同志たちはたちまち腐敗し、そこにはただ名声と利権の奪い合いに熱中する醜い姿があるだけであった。

一九一二年五月、師復は△晦鳴学舎▽を広東に創立して、アナキズムの宣伝を開始した。また、アナキズム運動と不即不離のものとして世界語(エスペラント)研究会を組織し、その運動をも開始した。こうして、今までは東京とパリにしか活動がなかった無政府主義運動が、中国の本土にはじめて根をおろし、最初の団体が誕生したのである。

一方、師復は革命家の腐敗、墮落を防ぐためには、日常からその習性を陶冶しなければならないと考え、△心社▽を作って、きびしい肉体的政治的禁欲を提唱した。それは中国固有の道徳にのっとり、①肉食しない、②飲酒しない、③喫煙しない、④奴婢を用いない、⑤結婚しない、⑥姓を名乗らない、⑦官吏にならない、⑧議員にならない、⑨政党に加入しない、⑩軍人にならない、⑪宗教を奉じない、⑫人力車やカゴに乗らない——という社約を、自ら率先実行するものであった。(このきわめて中国的なアナキズム道徳は、当時の革新的な青年の心裡に深く浸透していった。そしてさまざまな形で諸運動に影響を与えるものとなった。それは国民党や、毛沢東の中国共産党にすら及んでいる点で、注目すべきことである。)

さてこの一九一〇年代には、留学生の多くが帰国して、あちこちでアナキズム運動をはじめたが、しかしこの時期にもっとも早くから活発な動きを展開し、おどろくべき精力でもって大量の出版物を発行したのは、実にこの師復とその晦鳴学社(のち民声社)であった。

機関紙『晦鳴録』は『ラ・ボーチョ・デ・ポポーロ(民の声)』とエスペラントの副題をつけ、一九一三年八月に広東で創刊された。第一号の巻頭に、「平民の声を以て自らの任務とする故に、その言論は直接に平民のものである」という緒言をかかげたが、それは実に、大衆のレベルにはじめて基礎を置いたアナキズムの声にはかならなかった。しかし、そのあまりにもめざましい活動のためと、孫文の第二革命の敗北によって師復とその印刷所組織は、まもなく活動地を追われ、移転に迫られた。すでに袁世凱によって逮捕命令が出されていた師復は、広東からマカオに逃げ、ここで紙名を『民声』とかえて三号、四号を刊行した。それを知った袁は、ポルトガル政府に圧力を加え彼の引き渡しを強く要求した。三たびそこをのがれた師復は、一九一四年各地を転々としながら、ようやく上海の共同租界に潜入し、アジトをつくったのである。

民声社の活動は、地下印刷所を持つての出版活動——アナキズムの大衆的宣伝啓蒙から出発したが、ただそれだけであつたのではない。師復は、誰よりも早く、労働者の組織活動に注目していた。広州では理髪職人や茶館使用人の組合をつくり、上海で漆業職人のストライキがひろがったとき、直ちにパンフレットをつくって運動の方針を示し、団体をつくり知識を求めよ、とその組織化を呼びかけた。また労働者向けの雑誌『工人宝鑑』を発行、アナルコ・サンジカリズムの宣伝を開始した。それは中国の歴史において、労働者の運動に注目し、その組織化を進めた一番最初のものであった。

また『民声』は世界各国に送られたが、その紙面半分のエスペラント記事は、中国のみならず海外の情報も載せて、運動の国際的交流と、エスペラント普及の役割を大きく果たすものであった。『民声』の各号には、海外諸国のアナキズム潮流や運動の記事が載っていないときはなかった。とくに二一〇号（一九一四年八月二日）には、国際アナキスト大会に送った師復の、「中国アナキズム運動の歴史と現状」というエスペラント語の報告や、エマ・ゴールドマンから著書の寄贈を受けたという紹介と彼女の写真などが見える。またそのあと、日本で大杉栄らが出した月刊『平民新聞』第一号が、政府の発売禁止処分を受けたにもかかわらず、民声社では創刊号一部を無事受けとった、という記事などが載せられている。（丁度このすこし前、山鹿は民声社の一員として、師復の活動を助けていたのであった。そして彼のエスペラントが、これらの仕事に大きく役立ったのは当然のことだろう。）

このように『民声』によって引き起こされた運動のひろがりには、一九一四年七月にまず上海で「主義を宣伝し学理を研究し、国内の同志および国外の宗旨を同じくする団体と連絡する」目的をもった△無政府共産主義同志社▽が設立され、単に宣伝啓蒙をこえた組織活動の第一歩をふみ出すことになった。同社はスイスに本拠をおく△ジュラ同盟▽に加盟すると共に、八月ロンドンで開く予定の国際アナキスト大会に対して、「一、万国機関を組織すること、二、東亜での宣伝を重視すること」など六項目の提案をするなど、国際的活動にも取り組みだした。

これに呼応して、南京、常熟、広川、三水、ラングーン、さらにサンフランシスコでも二〇名の会友をもつ無政府主義研究会を組織するなど、次々にグループが生まれてきた。また、それに併行して、とくに力を入れたエスペラント語の普及活動は、広州では専門学校に学ぶもの三〇余人、別に夜

学や日曜研究会で六七〇人の学生があり、その他香港、常熟、粵門でも運動がひろがっていった。しかし師復は『民声』二二号の発刊後、過労のためついに倒れた。そして一九一五年三月二七日、肺結核によって死んだ。（肺癌ともいわれる。）数年後にくる運動の発展や五・四運動の輝かしい昂揚を見ないまま、まだ二九歳の若さであった。同志たちは、病臥中の彼の入院手術費数千元を調達するため、何度か民声社の印刷機一式を売却しようとした。師復の、同志たちにあてた最後の手紙は手術を固く拒んで、次のように書きしるしている。「現在『民声』危きに垂んとし、幾んど將に筆を易えんとす。余の『民声』を憂うる、病を憂うるに較べて更に甚だしと為す。もし『民声』を嗚呼し、余もまた真成に不治の癆病と為せば、則ち師復まさに無政府主義と共に、支那の黄土に葬られんのみ」

彼の死後『民声』は佩剛が発行を受け継いだ。が、やがて隔週刊となり、最後は不定期刊となつて、一九一六年一月二八日第二九号を出して終刊したのである。

師復以後の中国

師復の死は、中国のアナキズム運動のもっとも偉大な人物をあまりにも早く失うこととなった。しかし、彼の短期間の活動が残した著作と、その実践による思想は、死後においていっそう大きくひろがり、人びとに働きかけるものとなった。

一九一八年に蔡元培らの組織した△進徳会▽の信条は、師復の心社二二カ条の引き写しであった。これより先一九一七年五月には北京大学生のなかに△実社▽が結成され、黄凌霜、区声白、大侔など

が『自由録』を發行し、クロボトキンの『相互扶助論』を解説したり、労働者の総同盟罷工を論じた。その他、南京の△群社▽は『人群』を發行し、大原では△平社▽が『大平』を出した。また一九一八年三月から呉稚暉は、上海でアナキズム宣伝誌『労働』を日刊で發行した。(これは中国に初めてメーデーを紹介した。)これらの結社は一九一八年中にすべて閉鎖命令をうけたが、しかし一九一九年一月には合併して△進化社▽をつくり、『進化』を發行、その三号(三月)を師復記念号にあてているように、これらはすべて師復の遺志を継ぐ人々であった。

またその年の五月四日、ベルサイユ講和条約を契機として、中国を革命の渦に巻きこんだ五・四運動は、いかなる既存の団体や政党が指導したのでも組織したのでもなかった。それは前年発足した救国会をもとに、各地に学生の連合が生まれ、それら各地の学生連合が運動を推進した。そのそもその火ぶたをきった発起団体の一つ、北京の高等師範のつくった工学会の△工学主義▽は、師復の強い影響を受けたアナキズム系のものであった。このひとつの例でも明らかのように、師復の生前の活動とその遺業は、五・四運動以後の中国革命の思想に深い影響を与えた。極言すれば、現在の毛沢東の中国にもなお、それは脈々と生きて影響を与えていると言えるのである。

× × ×

さて民声社での山鹿の生活は、はからずも半年足らずで終わることとなった。一九一四年八月大杉から山鹿のもとへ手紙がとどいた。『近代思想』をやめ、いよいよ『平民新聞』を出す。帰って来てそれを手伝わぬか」とのことである。彼にはまだヨーロッパへ行くという希望が依然としてあったが、師復に相談すると「我々の方は何とかなる。中国と日本の同志がいよいよ連合を密にすることに

よって共に力は倍加する。きみは帰国して活動するのが当然だ」という。師復はその頃、一号発行しては寝込むという風に体が弱りかけていたが、山鹿との別れに際して、銀箔の扇面に次の文句を書いた。

無政府者無強權也非擾乱也 克魯泡特金語 財産者贓物也資本主義者盜賊也 蒲魯東語

為山鹿愛友

師復

(これは右手が利かない師復が、筆でかいた文字としては唯一のものとなった。後年中国からの依頼で、写真にとって送ったことがある。)

こうして東京へ帰ることになった山鹿は、半年たつたためかうちに、師復の計を満腔の思いで聞くことになったのである。